石川県内の船関係資料

金山　哲哉（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

県内資料について

舟（船）材 14 遺跡 52 点、櫂 14 遺跡 47 点、アカ取り 6 遺跡 13 点、舟形 43 遺跡 118 点、絵画資料 4 遺跡 4 点、合計 234 点を確認した。船本体の資料は、七尾市三室トクサ遺跡出土の縄文丸木舟 1 点を除き、他はすべて弥生時代以降の準構造船材であり、半数以上が井戸側転用材として出土している。櫂については、最も古い資料では七尾市三引遺跡の縄文時代早期末～前期初頭まで遡ることができる。アカ取りは出土点数が少なく、形態的に農具のもみすくいとの区別の問題があり注意を要する。最も資料点数の多いのが舟形であり、関係資料の半数を占める。材質別では、木製品が 108 点、土製品が 9 点、金属製が 1 点となっている。弥生時代から確認され、時代ごとの形状の変化が注目される。絵画資料は、遺物（土器、琴板）、遺構（横穴壁面）に描かれたものの 2 種が確認された。

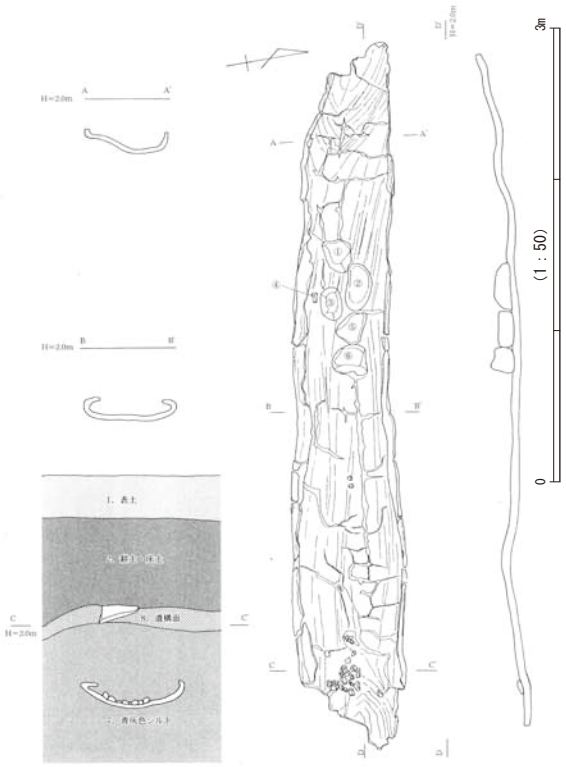
各時代の船と水上交通

七尾市三室トクサ遺跡出土丸木舟（縄文時代前～中期）は、舷側板をもたない縄文時代の単材刳舟である。能登町真脇遺跡や七尾市三引遺跡の櫂の出土例から、縄文時代前期にはこれらの遺跡の前面に広がる内湾を舞台に、丸木舟を用いた活発な漁労活動が展開していたものと考えられる。

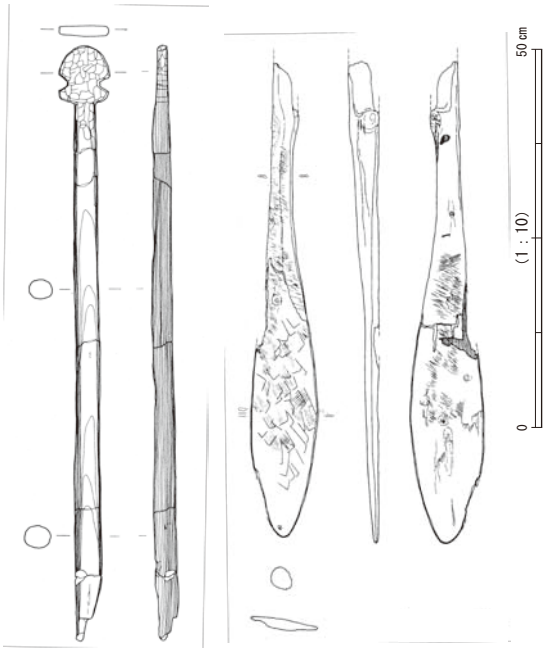
丸木舟は弥生時代においても使い続けられたと考えられるが、同後期以降の舟形に、舷側板を取り付けるためとみられる穿孔を船べり部分に施した資料や、船首尾に竪板を意識した切り込みを施した資料など、準構造船を模した資料が確認されるようになる。金沢市畝田西遺跡群出土の舟形の部材とみられる竪板（古墳時代前期）は、実物の竪板を小型化したかのように精緻に作り込まれたものである。実船資料でも、加賀市猫橋遺跡の舷側板（弥生時代終末）や、小松市千代能美遺跡の竪板（古墳時代前期）などの船材が出土しており、弥生時代後期～古墳時代前期の加賀地域には竪板型の準構造船が出現していたものと考えられる。これらの船が外洋を目指したか否かは不明とせざるを得ないが、出土遺跡を拠点に活躍したであろうことは想像に難くない。

古墳時代以降の船材資料は、井戸枠転用の船底部が主体となる。これらの船底部には弥生時代同様に丸木舟が用いられ、船べりに舷側板を取り付けるためとみられる加工（端部の平坦化、方形のホゾ孔等）が施されている。民俗例にみられるような、木材を接合するチキリ技術は弥生時代後期には既に確立していたと考えられるが、造船にチキリを用いた例は確認できない。その他の造船技術についても、小松市額見町遺跡出土の船底部（平安時代）に船梁とみられるホゾ孔が確認されるのみであり、中世に至るまで船底材の加工痕跡からみえる造船技術に大きな変化はない。一方で、形状を変化させているのが舟形である。古墳時代にはその殆どが船首尾ともに尖る平面形であった舟形が、奈良・平安時代以降、舳先は尖るものの、艫部は角形を呈する平面形状のものが現われ、中世にはほぼ例外なく同形状を呈するようになる。このような船尾形状の変化は、櫂から櫓への推進具の変化を物語ると考えられるが、現在の船材資料では欠落した部分であり、現段階ではその可否を明らかにし得ない。

文献史料上の古代能登には、ヤマト王権によって設置された造船を職掌とする船木氏の分布が散見され、同氏により東国征討のための軍船を建造された可能性が指摘されている。彼らがその素地となったかは定かではないが、大伴家持の能登巡行の移動手段に船を含め得る交通環境は、家持の歌から察せられる能登の盛んな造船活動を背景にもたらされたものであろう。弥生～古墳時代の竪板型準構造船にも増して、古代～中世の船は資料が少なく不明な点が多い。舟形にみえる形状変化を確認できるような、実船資料の増加が期待される。

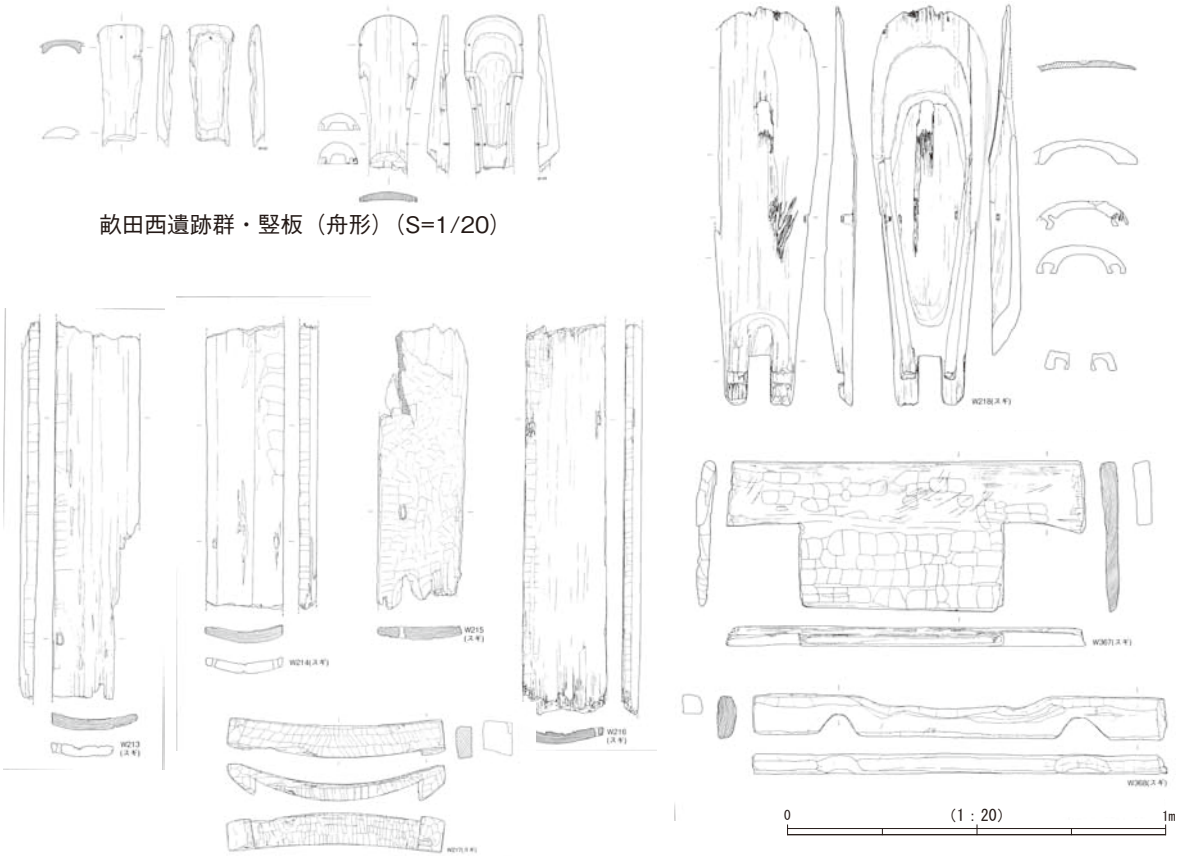


三室トクサ遺跡・丸木舟（S=1/50）

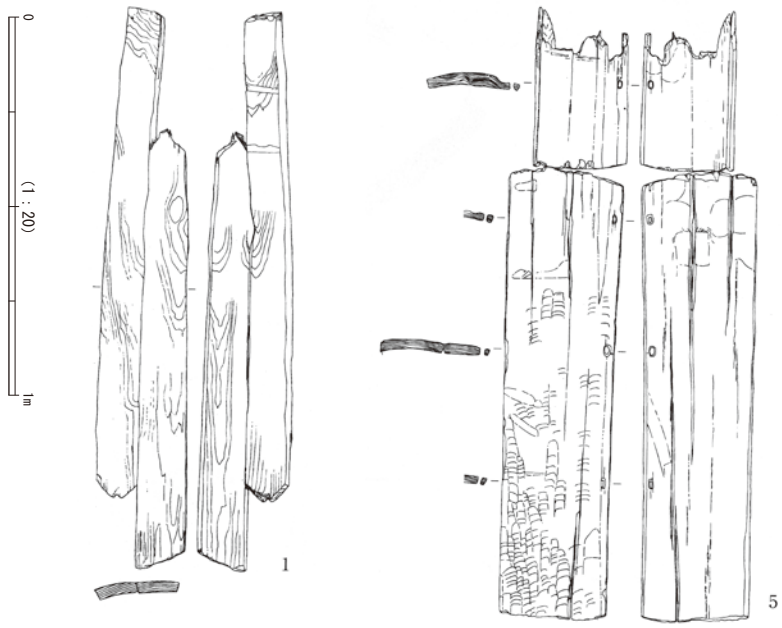


真脇遺跡・櫂（S=1/10）　三引遺跡・櫂（S=1/10）

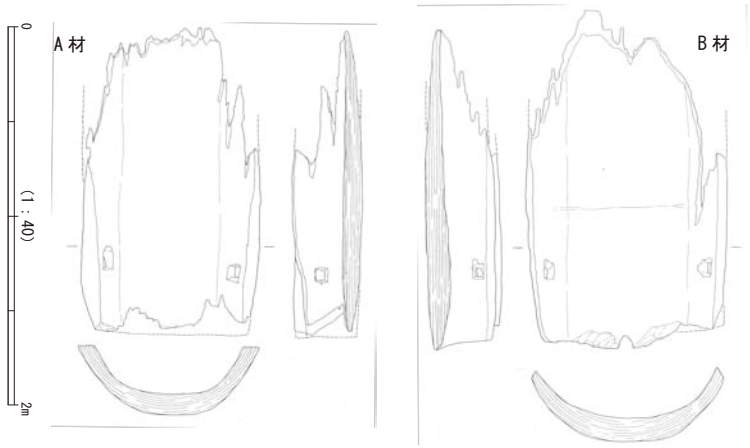
畝田西遺跡群・竪板（舟形）（S=1/20）



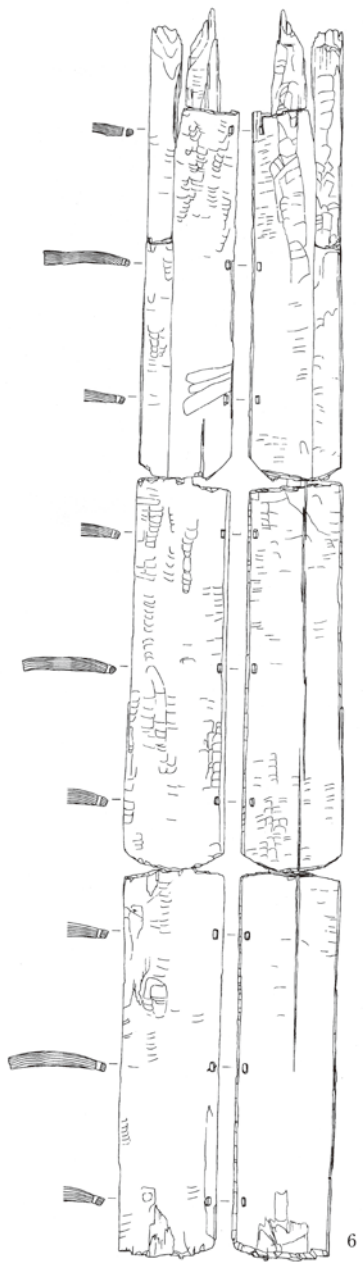
千代・能美遺跡・竪板ほか、準構造船材（S=1/20）

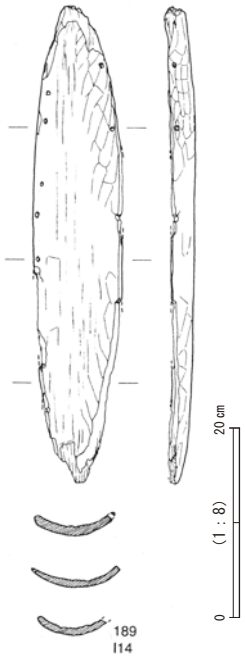


1・5・6：猫橋遺跡・準構造船材（舷側板）（S=1/20）

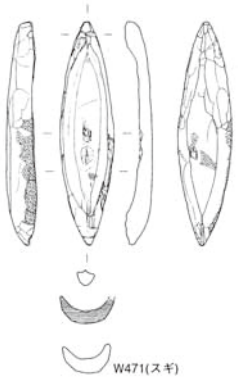


額見町遺跡・準構造船材（船底部）（S=1/40）

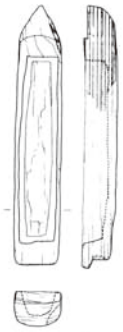




梅田 B 遺跡・舟形（S=1/8）

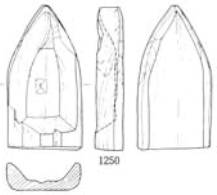


千代・能美遺跡
・舟形（S=1/6）



田尻シンペイダン遺跡
・舟形（S=1/6）

普正寺高畠遺跡
・舟形（S=1/6）



上町カイダ遺跡
・舟形（S=1/6）

0 (1:6) 10cm